



奨励賞

松ぼっくり

若杉町 波佐間嘉子

「面白くも無き世を「面白く」  
誰が語ったのであったか

「おっちゃん松ぼっくり拾いにいった  
ね」

「うん 帰りはいつも茶店でケーキを食  
べた」

不惑を越えた娘たちが喋っている

夫の兄

家を継ぎ守る長兄ひとであった

築一〇〇年に近かった家

風呂は昔ながらの薪風呂で

松ぼっくりは焚き付けに使った

一人で拾いに行くのは余りに淋しかった  
のだ

常に小学生だった私の娘二人を誘った

コーヒーが好きで

馴染みの店もあつたようだ

気丈な年寄りになっていたのに

土間で転んで

脳の大事な所を打ってしまった

物言わぬままの七年間 そのまま

何も語らず旅立つて行ってしまった

アルバムに残る沢山の面影

その裏側の生き様

面白く 生きられましたか